



根津青丈のこと

宮坂 静生

近年ふと、根津青丈翁の連句とは、なんであったのかと思うことがある。青丈翁を思えば、その後継者東明雅先生のことに及ぶのが、私の中ではごく自然であるが、ここでは青丈連句の一端にのみ触れてみたい。

平成十三年十一月三日八十六歳で逝去された宮脇昌三先生が、当時八十八才の青丈翁を明雅先生に引き合わせ、信州大学文学部で翁の連句の講演と座の実作が披露されたのは、昭和三十六年九月二十三日であった。その頃、私は小諸にいた。高校の教師となつて二年目であつた。したがつて、当日のことは知らないのであるが、なぜか、その座のさまが目に浮かぶのである。なぜか考えてみるに、後に、当日の連衆であつた詩人の高橋玄一郎さんか、あるいは漢学者藤沢誠（里鳥）先生からか、座の様子をことまかに伺つたことが、あつたからかもしれない。青丈翁の連句へなみなみならぬ関心を明雅先生がお持ちのことは、以前から先生に伺つていたのである。

五木やや色分ちそめ秋冷やか 青 丈  
霧の絶間に白き有明 明 雅  
置洗ひ来し方思ふこともなし 玄 一郎

これが、信大連句会作品第一号の表三句である。翁は以後、毎月伊那から松本の信大文学部へ来られ、連句の指導をされることになり、ここに明雅先生を中心に信大連句会が発足した。

私が翁の連句の捌きを受けたのは、昭和三十七年七月八日、信大連句会第五号であつた。その時の表三句を記す。

木耳に柑酢香らし普茶料理 青 丈  
苔渡り来る風の涼しき 筑 邨  
野良人の草負ひ通る背をまげて 静 生

当時は、いわゆる社会性俳句が盛んな頃で、連句は一部の「物好き」を除いてもっとも社会的には低迷していたのではないか。そこに目を付けられた明雅先生の先見の明を後になつて私は気がつくが、その頃ははまだ、第二芸術論の余波が俳人の意識を支配しており、社会性を持った俳句をいかに詠うかが、私の関心事でもあつた。浅間山麓の大日向開拓地に何回も通い、戦前、戦中の満蒙開拓の辛酸を思い、「大日向開拓地」詠をノートに句集一冊分四百句ほど作った。そんな二十五歳の若者には、連句の世界はなまぬく、現実味が乏しいと感じられた。

野牛のような青丈翁が、ぼそぼそと低い声で出された発句の「普茶料理」がまず解らなかつた。玄一郎さんがお寺の料理だと小さな

声で教えてくれたが、食べたことがないので、わからない。お粥を想像し、「木耳」は夏季なので、もう一句夏を付けたが採ってもらえない。すると、第三は人情他の句を、と翁がいわれる。「人情他」がまたダメ。

この表の展開は「自・自」と続くので、ここで「他」がいい。できたら「人情他」だとう。私は、「野良人の草負ひ通る草丈に」とやつた。それを翁は「背をまげて」と直して採つてくれた。「草丈に」を「背をまげて」とは、なるほどと思つた。が、血の気が多い若者には、優しい気持ちは出たが、添削の仕方には清冽さが無いと感じた。その時、別に、私が何かをいつたわけではないが、「の」の字、「の」の字と翁は呟いていたという。これは、剽軽な玄一郎さんが後で、私にいつたのである。宗匠の添削に連衆が、「原句がなにも残っていない」といつたことに対し、「の」の字が残っているではないか、といつたという、例の逸話である。

私は、青丈連句を深く考えたわけではない。翁の連句が優れているのは、連句展開のルールに、自他の別を重視した点にあるのではと思つている。北枝の「付方八方自他伝」による、三句の転じの重視を、私はたまたまはじめに、翁から学んだことになる。翁という、自他自他と青丈さんの貌が思い浮かぶのである。

《筆者紹介》

このたび寄稿していただいた宮坂静雄先生は、ご存知の方も多いと思いますが、信州大学の教授でありながら、俳誌「岳」を主宰され、批評・評論活動にも健筆を揮われておられる俳人です。またこのたびのエッセイにも見られるように信大連句会の初期には明雅先生とご一緒に活躍され連句についても造詣の深い方です。現代俳句協会員、日本文芸家協会員、俳文学会会員。

著書には、

《句集》「春の鹿」、「花神俳句館」、「火に椿」、「山の牧」など、

《評論集》「俳句第一歩」、「虚子の小諸」「俳句原始感覚」、「子規秀句考」、「俳句からだ感覚」、「正岡子規—死生観を見据えて」ほか多数あります。

このなかで「俳句からだ感覚」(二〇〇〇年、本阿弥書店刊)は第一回山本健吉文学賞を受賞されたユニークで斬新な評論集です。「ころ」の表現に傾いて瘦せてしまいがちな現代俳句に、「からだ感覚」を復権させ、生の豊かな全体性を回復させようとする創見に満ちた俳句論です。金子兜太から鷹羽狩行にいたる三十一人の俳人を取り上げ、作品を分析しながら所論を展開される筆捌きはまことに興味深く、自分の中に新しい創作意欲の水門が次々に開かれてゆくような快さを覚えます。

(英二 記)

伊那谷雑感

日高 英二

影かやなぎか 勘太郎さんか

伊那は七谷 糸ひく煙  
棄てて別れた 故郷の月に

しのぶ今宵の ほととぎす

これは戦時中大ヒットした映画「伊那の勘太郎」の主題歌、「勘太郎月夜唄」の第一節である。私の伊那に対するイメージはもっぱらこの歌によってのみ養われ、最近に至るまで伊那は木曾谷と同じように深い溪谷に沿った狭隘な土地であるように思い込んでいた。

ところが一昨年の早春誘われて伊那を訪れて見ると、この迂闊なイメージはいっぺんに消し飛んでしまった。伊那はなによりも広々とした平坦な土地なのであった。しかも農地としての豊かさはそこに信州大学農学部が厳かに君臨するところからも分るし、

ハア 木曾へ木曾へとつけ出す米は  
伊那や高遠の、伊那や高遠の余り米

と「伊那節」に唄われているように、昔は中仙道木曾の宿々にここから米を供給していたことも後から聞いてなるほど納得したほどのものなのである。

さらにその景観を眺めると、東は仙丈岳や甲斐駒の秀峰を抱える南アルプス、西は木駒を擁する中央アルプス、二つのが峨々たる連峰に挟まれてその中央を天竜川が貫流する広

やかな扇状型の盆地で、その壮大さは、

山嶽三十里の月おおらかに 芦丈

の名吟に描かれている通りであった。

さて、根津英紗宗匠の「芋庵」での歌仙興行では馬刺しの珍味に美酒を振舞われ忘我の境に遊んだものだが、郷土史家の記述によれば、この地方は昔から客があれ茶菓は勿論のことすぐに酒まですすめる、客もてなしの温かな土地柄なのだそうである。石川淳が「諸国崎人伝」で描いた漂泊の俳人井上井月が十六歳で死ぬまでこの地方を離れなかったのは、この地の温かな人心に寄るところが深かったのだと思う。風呂を恵まれ酒を振舞われ、「千両、千両」と相好を崩す井月の佛が浮ぶようである。

落栗の座を定めるや窪溜り 井月

さらに郷土史家の調査によると、上伊那だけでも芭蕉の句碑が五十五基もある。西箕輪の仲仙寺には、

観音の薨見やりつ花の雲 文化元年

芦丈翁の菩提寺である長桂寺の近くには、身に沁みて大根辛し秋の風 享和元年などなどがある。芭蕉は当地に脚を踏み入れなかったのにこのように多くの句碑があることは、それを建てた俳諧の好士が大勢居たこととの証拠であり、凌冬から芦丈を経て明雅師へと受け継がれた蕉風の流れがこんな所で養われていたのかと、思わず嬉しくなってしまうような土地柄なのであった。

## 第一回源心コンクール表彰

源心庵の会 梅田 利子

第一回源心コンクールは去る一月十九日猫養会初懐紙の席上にて七十八名の出席者の見守る中、東明雅先生より特選二名、入選三名の方々に表彰状と副賞として先生の色紙及び短冊、図書券が贈られ、先生と夫々記念写真を撮りなごやかな雰囲気の中で終了した。

受賞者の方々に感想を尋ねると、どんな賞をもらうよりも嬉しいと言う答えに、コンクールを企画した私共も感激であった。

又「源心」の形式は、歌仙と同じ位にいろいろな内容を盛り込む事が出来る上、時間的には割合早く巻き上がると言うご意見を沢山伺い、コンクールの当初の目的を果し得た事は、この上もない収穫であった。

第二回のコンクールも計画の予定で、これからどうぞ源心形式をご愛用下さる様にお願ひ申し上げます。

## 《源心コンクール》通覧の記

原田 千町

あれはたしか昨年の同人会の後だと思ふ、源心コンクールの審査をお頼まれし、あまりにも私の身には重いことと、慌てて、お帰りがけの明雅師に、「私には」と申し上げかけた

が、「まアまアまア」と歩みをお止めにならず逃げておしまいにされた。御病後の師をお煩わせしてもと覚悟を決めた。

源心という形が出来たのは、平成六年十一月、江戸川区行船公園内、源心庵での小グループの勉強会に、明雅師の来席を仰いだ折であったと聞く。手元の控えを見ると、この日、よんどころない事情で「残念ながら源心の会欠席」とあり、この記念すべき場に私は立ち会えなかつた。その後も源心を巻く機会にあまり恵まれず、数回を経験したぐらいたったよう、審査など誠に僭越なことではある。

さてコンクールの作品が、ずしりと届く、84点、各巻下の部分は空白であり、作者、連衆共に全く分からないようになっていて、ざっと目を通して下選りするが、さすが猫養連の作品だけにレベルが揃っている。まず発句と表の出来を見て、次に気になる障りのあるものを外すが、どうも古い猫養流の觀念がしみついた目には、片仮名の打越その他細かな障りが目についてしまう。明雅師のよく云われる玉が転んで粒のある作品を求めて、ここで約三分の一にし、さらに詳しく見てゆく。

序破急の流れ、山場はどこか、それぞれの恋と花、そして述懐など。三句続きが宜しくないのは当然だが、然し、いわゆる空撓が、ただの付け味の悪い離れ過ぎなのか、または効果的に使われているものなのかは、読み取り

方で変わってくるようにも思える。20点程にしてから悩みが深くなった、一読、すんなりと疵もない作品には面白みが少なく、粒のある面白いと感じる作品ほど疵が多いようなのだ。そこで改めて没にした作品を見直してみると、ここに中々魅力的な作品があるではないか、これを戻して、さて改めて検討する、従って候補作品が倍以上になってしまった。

惚れ込むような句があると、その句の為だけでも選り入れたくなる。終には没にした筈のものがトップクラスに躍り出たりもし、又これぞと思った作品に決定的なミスを見つけて惜しんだりもする、疵の無いにこしたことはなく、なるべく直すべきだとは思ふが、少々の疵は恐れないことにした。試行錯誤の末、源心という新しい形に相応しく、なるべく新しいみのある作品を残すようにと心掛けた。今回の応募作品の殆どが佳作に入れても然るべき作品であったのだと思う。

最終審査の日、明雅師のお運びになられた作品と、私の選がほぼ合致した作品が特選、入選となった。選を終えて改めて源心の良さは、もっと連句界に知られるべきであり、知られば必ずや盛んになることは間違いない、その日の近いことを心からねがっている。

第一回源心コンクール受賞作品集

特選 「坂の街」 坂本 孝子 捌

片蔭や渋谷はどこも坂の街 坂本 孝子  
 しとどの汗をあふぐピケ帽 大窪 瑞枝  
 G線の調べ静かに奏でゐて 佐古 英子  
 首をか上げた犬が横向く 山寄 一恵  
 夕月に提げ来る魚籠を滴らせ 梅田 利子  
 おわら祭のふるまひの酒 恵  
 姐さんが貢ぐ男の秋裕 枝  
 ささやきながら耳を噛むひと 恵  
 改革の今国会が面白い 利  
 株価操作でこの年も暮れ 英  
 終電車架線の雪はばさと落ち 恵  
 命からがら越えし国境 英  
 似顔絵のデフォルメされる花の下 利  
 目鼻かしこく育つ若駒 英  
 モンゴルの果てなき丘に霞立ち 利  
 揮しめて励む仕送り 枝  
 鍼按摩浮世嘶も癒し系 英  
 エレベーターの素透しのビル 枝  
 随ちてゆくふたりに怖いものはなく 利  
 歎喜菩薩よ蜘蛛の囀の中 全  
 まだ温き白磁の壺は母の骨 恵  
 紙漉きをりぬ月のぼるまで 枝  
 バス停は小夜の千鳥の鳴くところ 枝  
 スポーツバッグで教師赴任す 枝  
 子規漱石因みに吾も落語好き 英  
 I T革命星に電波を 枝  
 舞ふ花の齢も知れず過疎の村 孝  
 摘みたてクレソンもてなしの皿 英

特選 「月に歌ふ」 鈴木 美奈子 捌

月に歌ふライザミネリの紐育 鈴木美奈子  
 人種さまざまうそ寒の街 東 郁子  
 新築の秋味一本ぶら下げて 松島アンズ  
 広縁に置くFAXの台 椿 照子  
 肩ならべ鰐口揺らす除夜詣 篠原 達子  
 悴んだ手を彼のポケット 全  
 アパートの合鍵しまふ定期入れ ズ  
 大売出しの旗がひらひら 郁  
 地主から預かる札のひんやりと 達  
 狐顔してボルシエ転がす 照  
 アルプスを左に黒四ダム右に 郁  
 近づいて来るふるさと風の ズ  
 本丸は所狭しと花の宴 郁  
 煙草やすみのしゃぼん玉売り 達  
 児童館たにし長者の紙芝居 ズ  
 お祖父さんの時計突如鳴りだす 郁  
 土壇場の卓に投げ出すフォアカード ズ  
 ブラボー俺は夜のピエロさ 郁  
 底冷えの駅に客待つ靴磨き 達  
 殿下の恋に侍従あたふた 郁  
 中庭高く揚がる噴水 照  
 森の精かろき輪舞に月涼し 郁  
 夢の入籠にまた夢のあり 奈  
 ホームラン息子ボンズも駆けだして 照  
 上場記念ロゴのTシャツ 達  
 花何処この群青の空の下 ズ  
 蝶と戯る砲台の跡 奈

入選 「秋裕」 倉本 路子 捌

百代のわれも過客や秋裕 倉本 路子  
 雲吹き晴れて昇る初月 長崎 和代  
 園児らとすすきみづく作りゐて 染谷佳之  
 フレンチトーストすこし焦げたる 竹田登代子  
 早々と畳替へ済む牧師館 代  
 押しくらまんじゅう惚れた娘を押す 之  
 口喧嘩お国訛で仲直り 代  
 貸した借りぬはここで御破算 路  
 しゃらしゃらと偽ブランドで飾りたて 登  
 顔ひん曲げし金太郎飴 登  
 大江戸線奈落の底で乗り換へる 路  
 メトロノームをスローテンポに 登  
 ギャロップのリズム楽しむ花の下 登  
 かみそり魚を釣りあげし夢 代  
 春闘の闘士も今は白髪に 之  
 木喰佛の頬を撫でをり 全  
 犬の名はクイーン汁かけ飯が好き 登  
 年賀の靴の並ぶ踏石 之  
 笑み满面禁酒の誓ひどこへやら 路  
 つまみ出したる皺くちやの札 之  
 ヒツチハイクの少年拾ふ下心 登  
 また逢はうねとやはらかに噛み 登  
 月涼し波穏やかな地中海 之  
 モノクロ映画映す短夜 登  
 分校の持ち寄りの椅子小さくて 登  
 雀がちゅんと膝をつつつく 之  
 爛漫の花を眺むる遠眼鏡 路  
 利茶の席に外つ国の人 代

平成十三年六月二十七日 於青山ウィメンズプラザ

平成十三年十月十四日 於南柏光ヶ丘近隣センター

平成十三年十月二日 於新宿消費生活センター

入選 「宮益坂」 鈴木 慎二捌

入選 「アンソニー・クイン追悼  
「ザンパノ逝く」」 棚町 未悠捌

足急ぐ宮益坂の走り梅雨 鈴木 慎二

うの字の長き鰻看板 梅田 利子

フリーター落語クラブに集ひ来て 峯田 政志

肩書のない名刺作らせ 登坂かりん

島々の影黒々と月昇る 坂本 孝子

典礼聖歌習ふ七夕 孝子

紙袋抱へて少女林檎の香 孝子

麻疹のやうな恋を知り初む 利

その罪の認め難さよ外務省 孝

犬と申せばおおかみも犬 利

文庫本中島敦読みさしに 孝

同窓会の出席に丸 志

シャンパンの泡ちりちりに花明り 孝

百歳雛の笑みの尊き 孝

東都にて醍醐薬師の出開帳 志

モンゴル力士小気味よき技 利

豆腐屋も国会中継手を休め 孝

物干台に吊るす風鈴 孝

蚊吸鳥爪染めあげて宵の口 孝

玉の輿乗る胸の大きき 利

欲望といふ名の電車いつの世も 孝

三つにひとつつじゃんけんは勝つ 利

点となる雪後の月の逃亡者 志

チボリ公園羽織る毛衣 孝

ニューイヤール隣り合ふ人キスをして 孝

眠り薬の半錠を服む 志

道標をたどり一里の花の宿 二

とりよるふ山春を惜しみつ 人

短夜の海も喇叭も黙すかな 佛淵 健悟

遠く轟く梅雨の雷 棚町 未悠

ライナーに観衆五万どよめきて 若林 文伸

市内観光馬車に乗り込み おおたけんのすけ

揺籃に眠る赤子を照らす月 秋山志世子

モンマルトルで稼ぐ秋蝶 悟

娘連れたち寄つてみるロザリオ祭 悠

乾燥室に剣道衣あり 悠

ITと囃し立ててる金儲け 伸

大樹に抛りて呪文唱うる 伸

ふんどしもきりり空中浮遊術 伸

桃色竜がうねる幻影 伸

四世の飲茶老酒花の宴 伸

春の風邪やと馴れて愉しみ 伸

仏典を繙く母に囁れる 伸

動き止めざる楼蘭の砂 伸

オアシスに屯してあるニューモード 伸

FOXのロゴ汗にまみれて 伸

突然に手渡されたる狙撃銃 伸

抱擁しばし北と南に 伸

妹が売られて行った日の霞 伸

夕霧楼を覗く凍月 伸

夢の半鐘遠く鳴り出して 伸

豆腐一丁ゆっくりと喰ふ 伸

糸垂らす無念無想の山の湖 伸

ジュラルミン光空を巡って 伸

花篝密かに刻を焚きすする 伸

打ち上げられし桜貝殻 伸



## 受賞のことば

坂本 孝子

この度は第一回源心コンクールに於いて賞を頂き、真に光榮に存じます。東明雅先生、原田千町氏の両選者、主催者、その他お骨折りくださった皆様に厚くお礼申し上げます。

源心という形式は、歌仙に比べ各面が二句ずつ少ない訳で、忙しさの中の時間短縮の為ばかりでなく、その分、転じや付け味・付け心の疎密の変化等、ハイテンポの面白さがあると思います。

最近、根津芦丈先生のお孫さんの根津忠史氏から『踏青余韻』という本をお借りしました。芦丈・忠二両先生の追悼集で、序文は東明雅先生。巻中芦丈連句の最初は明治三十四年十二月、馬場凌冬・青隣（後の芦丈）の両吟「星月夜」。人情はおっとりとして、自然描写もまだこの頃は、空気がきれいだったのだろうと感じられます。その後は、全国津々浦々の名立たる俳諧師たちとの風韻が滔々と続き、昭和九年九月、讃岐丸亀の吉岡梅游との両吟で目が止まりました。なぜなら私の生年月日から。当時の社会情勢は大変不景気だったと聞いています。しかしこの一巻、梅游・芦丈初めての対吟のせいでもあるのか、極めて優雅、古典的な付け運びで、連歌に近いようにも思えます。不況だの、失業だの、借金だのと日常生活のことなど一言も詠まず、かえっ

て時代感覚とはまったくかけ離れています。それががらりと変わるのには信大連句の時代に入ってから。俳味や日常生活の描写も加わり、ほとんど私達が今のめり込んでいる連句の源はここにありました。明雅先生のご指導を受けているのですから当たり前ですが。

さて新世紀に入って政治・経済・教育・宗教・その他・不安定な時代とはなりました。世界中がハイピッチで変化する今、人の心を打つものは何なのか、現実から幻想へ、具象から抽象へと逃げてばかりもいられないし、と迷いながら、やはり連句は面白い。

そぞろ神憑きて出るや春火燧

孝子

女学生のような嬉しさで

鈴木 美奈子

安曇野は昏れてむらさき春炬燵

『猫養庵発句集』の二番目に収録されている私も好きな句、この優艶な情感ただよう句の明雅先生御直筆の色紙を頂戴しました。

なんとこの幸運！明雅先生、千町様、連衆の皆様、ほんとうに有難うございました。

受賞式のあった初懐紙の日は大変でした。

「見せてエー」「汚れた手で触っちゃダメ！」などと、女学生のような騒ぎです。

以前、どういふ訳か受賞が続いていた頃、

先生から「美奈子さんは賞金稼ぎだね」とひやかされ、「先生！賞金なんて全然出ません！」と抗議したものでしたが、今回は、ほんとに本物、嬉しいかぎりです。

参考までに、作品のどの点が良かったのでしょうか、とお伺いすると「新しいからね」とのこと、あゝやはり、と思いました。

『ねこみの』前号で、先生は、連句の根本原理は「世態人情諷交詩」である、そして、新しさこそが一篇の詩の花であることを徹底させるつもりである、と書いておられます。

受賞作は、発句から時事の句でした。

9月11日テロの後、テレビから聞き覚えのある曲が・ライザミネリの「ニュー・ニュー・ニュー・ニュー」です。画面は、ブロードウェイのアーティストが6〜8列の縦隊、右に左にこの曲を歌いながら身体を揺らせて、運動する長方体のような一団でした。そうです、ミネリという、まだ健康であった一時代のアメリカ社会の底辺で、たくましく生きる芸人の象徴の歌を通じ、世界へメッセージを送っているのだと思えました。よき時代への愛惜で、却って現代の重さを表現している・・と。連句に時代の空気を取り入れることと、表現方法を身につけること、この二つを両立させていくことが、今後の難しい課題です。

しばらくは黄金律なり春の雷 美奈子





歌仙「初明り」 梅田 利子捌

踏み出せる絵馬の前足初明り 利子  
 襟浮ぶ杜のお水屋 和弥  
 卓の上見ら千代紙を散らしめて 景翠  
 自然食品レシビ集める 美代子  
 満月の隈なく照らす屋根の海 久美子  
 雁の便りはとんと届かず 玲  
 酌み交はす肴は鱸奉書焼 慎二  
 いたって固い名は鐵男です 鐵男  
 母親がやうやう嫁を見繕ひ 玲  
 鉄で切つて赤い糸解き 久  
 手かざしの納沙布岬異郷めき 男  
 道祖神からもらふ行先 二  
 戯作者の卜書にありし蟬鳴ける 玲  
 胡座のすてて二天心に月 弥  
 ビンラディン生死分らぬ国境 久  
 カレーライスを拭ふ口鬚 代  
 花大樹怪しきまでに咲き満ちて 翠  
 と金で王手縁のうららかに 二  
 耕して雨待つ関東ローム層 弥  
 似非発掘の鎮座する棚 久  
 托鉢の僧がこっそり宝くじ 男  
 てんてこ舞ひの鴉対策 久  
 パリダカに勝つてカスバの町に酔ひ 二  
 西日の部屋は君の香がして 玲  
 越えてみてなほ深みゆく恋のかげ 二  
 つらら暖簾に誘ふ雪姥 弥

介護士の声で真顔に返りたる 代  
 あら珍しと籠の松虫 久  
 国訛り捨てて久しき後の月 玲  
 ぶらり瓢箪貌のそれぞれ 翠  
 がたごとと路面電車の客まばら 久  
 円周率の暗記競つて 代  
 ケプラーの描きし軌道やや歪み 男  
 父の系譜は医者に科学者 玲  
 花に人ひとに花添ふ嵐山 利  
 胡蝶の舞を夢に見てをり 翠  
 連衆 権頭和弥 岩垂翠景 山田美代子  
 副島久美子 日高玲 鈴木慎二 林鐵男  
 歌仙「めでたさよ」 蒲原 志げ子捌  
 めでたさよ笑顔菟むる初懐紙 志げ子  
 淑気満ち充つ丸きテーブル 路子  
 湖凧ぎて公魚釣りの遠近に 碧  
 木の芽味噌和え腰の弁当 真呂  
 月を追ひ集団就職運ぶ汽車 凡  
 銅像の下ハモニカを吹く 弘子  
 ブランドにやたら詳しい化粧品 わ子  
 嘘を承知で奥の小座敷 哲  
 夢抱けば君は楊貴妃吾玄宗 呂  
 土用鰻の髭で挨拶 凡  
 正法も人も飽きたる世なりけり 呂  
 教授ケータイ鳴つてゐますよ 碧

出版の記念パーティー望の月 弘  
 秋裕には古代紫 わ  
 鬼の子は時に母恋ふ事あると 呂  
 何時か行きたい西行の旅 弘  
 カチンコの音に花散るロケーション 路  
 硯の池に風光る頃 碧  
 春愁ひ酒呑童子は忍びもせず 呂  
 大江山へと飛ばす高速 路  
 膝病みのひがみへ灸するさせて 路  
 辞退すれども三十億円 碧  
 洞穴の黒ターバンは凍てつけり わ  
 徹夜覚悟のワールドカップ 弘  
 『よくやった、感動した』と絶叫し 呂  
 不倫の果ての玉の輿へも 弘  
 ウエディングドレス、イコール、マタニティー 凡  
 お替り自由御飯味噌汁 碧  
 何時やらの禁句ぼっかり三日の月 哲  
 芸術祭は又も落選 凡  
 薬師堂住みつく猫に木の実降り 碧  
 肝心な時赤子泣き出す 哲  
 駄菓子屋のエーサーボーロ瓶に入る わ  
 日々是好日神の階 路  
 花浮かべ大河の一滴帰る海 げ  
 耕し終へる里のやすらか 呂  
 連衆 倉本路子 松本碧 木村真呂  
 中川凡 松原弘子 横山わ子  
 中川哲

歌仙「昭和の夢や」 近藤 守男捌

まどろめば昭和の夢や初あかり 近藤 守男  
 福寿草咲く窓辺馥郁 如代  
 北めざし青春切符抱くらん 啓子  
 木工細工腕の鳴るなり 英二  
 リュートの音林間幽か月さして 泉子  
 穴惑ひして水に入る蛇 麻子  
 赤い羽根目立たぬやうにつける癖 弥生  
 十七歳は多くば恥づかし あや  
 旬は今甘さほんのり熟れ加減 全  
 遺伝子組替してありません 啓  
 ハライソを願ふか隠れ切支丹 男  
 巴里の地下鉄俺の仕事場 泉  
 棹禰おまけの鯨が跳ねあがり 如  
 浴衣の人が月の路地裏 弥  
 灸すゑて腰痛ころと治りける 二  
 伸びがお上手縦縞の猫 如  
 早開く花の便りの伊豆河津 麻  
 干せし若布の潮しづく落つ 弥  
 遠足の昼飯どきのかくれんぼ 二  
 ケータイぶるるポケットの中 弥  
 小座布団持つて小朝の独演会 泉  
 魔法瓶には吟醸酒詰め 麻  
 藪巻はなほ念を入れ男衆 や  
 鷹舞ふ岬くきやかに晴れ 麻  
 覚悟して逢ひに来たれど君は留守 如  
 化粧せつなく撫づる骨壺 や  
 遺言のLOVE YOUの文字読みかねて 二

株式市況乱高下また

三日の月黄落の今降り止まず 麻  
 テニストラケット磨く爽涼 泉  
 ハローインちさき妖怪ドア叩く 弥  
 昔ばなしを語る爺さま 泉  
 馬の毛の裏漉なんぞ厨棚 麻  
 講習会はいつもいつぱい 啓  
 にこやかに花守シャッター押してやり 男  
 紋白蝶が肩のあたりに 啓

連衆 伊勢本如代 小池啓子 日高英二  
 青木泉子 内田麻子 本田弥生  
 中林あや

歌仙「悍馬の蹄」 坂本 孝子捌

天空に悍馬の蹄年立てり 孝子  
 淑気漲る雪の山脈 冬乃  
 飴もらふ薄紅梅の匂ひみて 鶴鳴  
 けふは菜飯を炊ける厨辺 時子  
 春飛魚の月光浴びてとぶならん 志乃  
 巨匠指揮するバレエ組曲 英子  
 既視感の底よりひろふ過ぎし時 香  
 人間喜劇千差万別 有史  
 なにいうてまんねんあんたはうちのモン 志  
 女帝待望ふりそそぐ愛 香  
 汽車の窓遠く蠟の火が燃えて 鳴  
 大麻を匿す帰省子の月 冬

額づけばイエスの流す血と涙

マチスの赤に止める足音 志  
 川沿ひに古本販ぐ店の出で 冬  
 探鳥会の昼はおむすび 史  
 人柄のころりと変り花見酒 鳴  
 海市から来た髭面の香具師 英  
 中国の排気ガス混ぜ黄砂降る 冬  
 オリソピックにスポーツチャンバラ 冬  
 甲冑を蔵より出して競りにかけ 香  
 午後の紅茶を淹れる伯爵 冬  
 庭番が森駆け抜ける露踏んで 志  
 老蝶のごと肩に回す手 鳴  
 ゆく秋の下着がはりに本を伏せ 時  
 人恋しさの横挿しの菊 香  
 もろともに六道輪廻古都の月 鳴  
 戦士の塚かアラビアの文字 香  
 始祖鳥の骨ポキポキと音のして 英  
 この腰痛は冷房がもと 冬  
 夕立を言訳にしてもう一番 冬  
 終日倦かず点描の画架 鳴  
 ウイーンまで自分さがしの旅の果て 時  
 お蔭様にて息災の文 香  
 牧童の口笛透る返り花 英  
 捨舟乾く水滴れの岸 史

連衆 百武冬乃 井上鶴鳴 梶井時子  
 宮内志乃 佐古英子 若松香  
 荒川有史

歌仙「玲瓏の」 橘 朱鷺子捌

玲瓏の富士仰ぎたり初懐紙 朱鷺子  
 わが行くところ恵方なる道 央子  
 クロッカス・スノードロップ開くらん アンズ  
 諸子の群れはさざ波の湖 一郎  
 屋根替もやうやう済みて月昇る 和代  
 出来も不出来もそれなりに良し 洋子  
 代議士の後引き継ぎし次男坊 秀樹  
 呼びだし受けしことがなれそめ 央  
 君作るかつ井の味置炬燵 洋  
 日がな一日探す失せ物 代  
 ニッポニア・ニッポン亡ぶ予感あり 郎  
 頭脳流出進むうそ寒 樹  
 月中天異郷でひらく落語会 ア  
 五合のパック新酒配られ 郎  
 もてあます内弁慶の泣き上戸 代  
 習はぬ経をすらすらと読む 樹  
 信濃路を辿り若葉の花に逢ひ 郎  
 尺取虫の匍つてゐる杖 央  
 ナッ  
 ファッションのやうにゴルフのクラブ持つ 代  
 試されたのか絵画療法 ア  
 お隣は門灯の球切れしまま 代  
 又三郎が虎落笛吹く 洋  
 氷雨中裏の畑を見回りに 同  
 犬猫同じ服縫ってやる 代  
 新しい漢に合せ変る趣味 洋

大気圏での寝技足技

この頃は幸福駅に人まばら 同  
 姫皇子様の笑まひ爽やか 樹  
 岩を割り老樹となりし松に月 代  
 八幡神社亀も放たれ 郎  
 タクシーに確かふたりを乗せた筈 央  
 サスペンス賞総紙めにして ア  
 ぎやまんの骨壺作る工芸家 央  
 掛け捨て保険特約も付け 樹  
 舞ひやまぬ花惜しみけりそれも須臾 洋  
 吟遊詩人春の夢みる 朱  
 連衆 遠藤央子 松島アンズ 古賀一郎 洋  
 長崎和代 大島洋子 青木秀樹 樹  
 歌仙「旅かばん」 豊田 好敏捌  
 麗峰や年のはじめの旅かばん 好敏  
 初刷インクにほふ小冊子 道子  
 千筋菜土間いちめんに積まれゐて 達子  
 宿題のない春休み好き 美奈子  
 魚島の見張りをすれば月昇り 珠枝  
 パイプタバコの煙くすぶる 豊美  
 Eメールまづ書き出しは「元氣です」 實  
 細っそりとしてうぶな若者 くのあや  
 だしぬけに接吻されて汗が退き 実  
 逃がした金魚ちよつと残念 奈  
 裏町のテリトリーをば守る猫 道

ぼろ儲けする税の元締め

法楽の蒔絵づくしに囲まれて 奈  
 ゴッホの耳はその後どうした 達  
 何もかもご破算だよとフィレンツェへ 道  
 大き袋に流行の服 奈  
 月揺るる水面に冬の遠花火 豊  
 都鳥踏む砂のきしきし 実  
 ふところ手橋渡りゆく権九郎 や  
 昔の駄菓子甘さなつかし 奈  
 オルゴール唐草模様の陶の箱 珠  
 あばかれし墓出たは石ころ 豊  
 ふつつりと黒髪切りて御前にと 珠  
 白き肌みる湯けむりの奥 達  
 うれしきは今日も五匹の虻捕る 豊  
 薩摩隼人を酔はず焼酎 道  
 城跡戊辰の恨み今もなほ 奈  
 ナンを焼く子の哀れ身に入む 豊  
 解禁の踊りに月も愛づるらん 実  
 胡弓ひびきて渡る初鴨 や  
 ナッ  
 ITの講習すぐにマスターし 達  
 イチロウ人気長鳴を抜く 達  
 父卒寿鳥居奉納済ましたり 達  
 商ひのどか続く土産屋 や  
 笛ひびき花満開の能舞台 敏  
 酔狂寄ればさらに日永し 実  
 連衆 加藤道子 篠原達子 鈴木美奈子 奈  
 花巻珠枝 高橋豊美 梅田實 くのあや 達

歌仙「睨み鯛」 八代 扇捌

睨み鯛にらみを効かせ二の替

常義 蘭玉いくつ数ふ児の声

あかり 里山の径ジョギングコースにて

了斎 犬の尾と脚長ささまさま

富美 夜は更けて切り絵のやうな窓の月

澄子 芋煮の会の知らせ待たるる

美津 丹精の菊を飾りて入選す

斎 眸と謎謎がたつぷり

常 埴輪めくをのこをみな語りひて

津 煙草のけむりつくる「の」の文字

常 ドア越しの波止場の酒場ジルバ鳴り

津 メリケンザックひよいと担いで

り 蜘蛛払ひ海外青年協力隊

同 棉蒔を終へ仰ぐ月代

澄 豆本は武井武雄を秘蔵せり

り 誰かが来ては座る広縁

津 かがり火の消え魍魎の花見刻

常 禿捧ぐる朝の桜湯

斎 黒潮へ大風揚げる島の衆

常 ノロの祝詞はうなりうねりて

富 地ビールを陶のジョッキになみなみと

り かんざし展で買へぬ鼈甲

常 卒寿の師大好物の雪女

斎 白息の唇ふさぐたまゆら

富 仏像の真贋鑑定ひねる髭

斎 埃と債務すぐ厚くなり

富 カラスゆゑ利巧者よと嫌はれて

アンタのこともぜんぶ知っちゃう

常 けふも晴れ有明月はしろじろと

斎 貨物列車で西へ行く秋

り ゆつたりと後の袷を着こなして

同 錦を飾り持葉少々

斎 ちぎれ雲ぐるりとまはる津軽富士

津 雀を描く墨の濃淡

媛 花盛り又誰彼を思ひ出し

澄 あそこにはもう春の泥濘

連衆 生田日常義 中田あかり 鈴木了斎

村田富美 八角澄子 桑原美津

歌仙「薺爪」 山口 美恵捌

美恵 ペデキユアの朱かすかなり薺爪

美恵 宙に舞ひたる歌留多一枚

淳子 軒下に燕来るを待つならん

り かりん キックボードの子らの春泥

淳子 月渡る連翹垣も影持ちて

文伸 旧街道に残る本陣

未悠 芝居はね素顔の役者小走りに

敬子 あなた好みの香を焚き染め

ん prettyとたったひとこと言ってみて

淳 ここが痒いの手が届かない

悠 新豆腐味見の窓に織き月

郁 鐘叩き鳴く庭の片隅

敬 芒野を分けて一筋小海線

オールバックを七三に変へ

淳 決闘の立会人も現れて

巳 魔女の籠に滾る大鍋

淳 花火師はジーンズ纏ひ闇の中

郁 エンジェルフィッシュ頼みまた留守

悠 FAXがことと旅を誘ひ来て

巳 賢治と共に登る早池峰

伸 理学部のシャーレに育つ新種菌

伸 すぐに食器を洗ふ若者

淳 寒施行畔に置きやる油揚げ

伸 スケートバスは深夜出発

郁 そもそもは軒に文句つけし仲

敬 無理難題を通す嬉しさ

巳 汁粉屋のおやぢキープのピュアモルト

郁 神経痛も寝る程でなく

ん 人数揃に馳せ参じたる月の坂\*

悠 あらびつしりと猿の腰掛

淳 うり坊の出没騒ぎゴルフ場

ん パチンコの玉踏んだ陸橋

淳 良きことを拾ひ拾ひて今日を生き

郁 故郷の歌どこからとなく

恵 しいさあのうつとりとゐる花の風

仕上げ上々鯛の浜焼

\*長崎おくんちの祭の前に同じ装束で集まること

連衆 上月淳子 登坂かりん 東郁子

島村曉巳 若林文伸 棚町未悠

須賀敬子

朝日カルチャーセンター

「連句入門」教室

松島 芳子(アンズ)

一昨年秋、新宿の朝日カルチャーセンターにて、連句入門教室の門をたたいた。

連句の予備知識はまるでなかった。愛読する式田和子先生の御著書に、度々いかにも面白そうに登場する連句とは何かを知りたいというだけが、入門の動機であった。私は俳句に親しんだこともない。国文学とは高校の古典の授業を最後にお別れしたままである。

初日、初めての方はこちらへと、最前列の席を指示された。失礼いたしますと、通路を通らせていただく時、お辞儀申し上げた白髪の紳士が猫養会主宰東明雅先生でいらしたとは、その時点では知る由もなかった。

これをと、渡された白いカードの謎謎のような言葉に首をひねるうち、前半の講義が始まった。市野沢弘子先生の準備されたプリントは高度な内容で、漢字に振り仮名を書きこみながら懸命に耳を傾けた。そして後半、演習があるとは思いがけないことで、短冊を配られた時は途方にくれた。二十韻の名残の表にはいるところと理解するのは、この後数ヶ月たつてからである。まるで途中で入った映画館のようであった。

後の席の方に振り向いて、何を書いたらいいでしょうと、心細く聞くと、冬の季節で五

七五ですよと、親切に教えて下さった。私が寄せも持っていないのを見て、貸して下さいが、残念ながら使い方が分からない。冬なら氷はどうであろう、ままよと指を折りながら氷の事を書いた。

黒板に三十余りの句が書き並べられたのを見て、そのさまさまの冬模様に感心した。どれがいいと思えますかと、問われても選ぶのは難しかった。

教室のやりとりを聞いていると反則ルールがどっさりあるようで、これは手も足も出ないとお先真つ暗に思われたが、前納した授業料のこともあり、ともかく半年は続けなくてはと思った。その後しばらくは出句はパスということで見学したが、それはあまり楽しくなかった。

年が明けて教室で配布された猫養会初懐紙の案内プリントに、出席マークをつけたのは何を考へてのことだったろうか。会場で、式田先生の隣に座らせていただくこと

「なんでも思いついたことを書きなさい」と、ありがたいお言葉で、無知をいいことに私はあらゆる捻破りの句を乱造した。すると、先生はそれらをすらすらと付け句の形に直しては、お捌きに渡されるのだった。

そして、次の句をお見せしたとき、初めてにつこりしてくださったのだ。

ハート絵文字で送るメル恋 美恵  
ひまはりの迷路の中に君を追ひ 芳子

(歌仙「福壽草」 武村利子捌)

前句のイメージがまざまざと脳裏に浮かんだあの瞬間は忘れない。連句の面白さを垣間見たような気がした。

その後、教室で「四三」とか「打ち越し」とか声が掛かるたび、五目並べのことかしら、どうして袴肩明きが(それは繰り越し)などと、いぶかしみつつ徐々に新しい知識を、吸収した。教室に机を並べていても、クラスメイトなどとお呼びしてはバチがあたりそうなベテランのお顔ぶれと気付くのも、いつものほんやりでだいぶ時間がかかってしまった。失礼がいろいろにあったと、いまさらながら恥ずかしいのだが、どなたも初心者如初歩的質問に丁寧にお答え下さり、暖かい雰囲気がありました。

「予習も復習もいらないのよ」

の、式田先生のお言葉を真に受けて、以来これをモットーに月に二度新宿へ伺っている。思いがけず先生との悲しいお別れがあつて、佛淵健悟先生の捌きとなった教室はまた一段と新たな雰囲気である。二時間はあつという間に過ぎてしまう。

連句の霊峰の輝く頂は遥かに遠いが、それを、見上げることができるとを幸せに思う。

芥川運河にいたる花筏 アンズ  
拾った仔猫やつと目が開く 全

花つくし発句集

時 平成十四年三月三十日

於 緑華亭 花の本連句会

三鷹神代植物園内

花吹雪おん掌さし伸ぶマリヤ様	志世子	レトロなる駅も新し花の山	英子	ルーキーのアーチ花びら潜り抜け	昌子
観覧車湧きあがりくる花の雲	實	しきりなり身にも胸にも花の散る	澄子	うつし世の果ては惚けて花の夢	政志
花散るや亘くづしの勾欄に	久美子	夜櫻の白さののこるねむりかな	豊美	自らを欺くばかり花黙す	けんのすけ
老幹の曾孫やしやごも花盛り	達子	散る花や目出しだるまの眼を閉ぢて	かりん	夜嵐に惜しむ心ぞ花なれや	孝子
花万朶揃ひ衣裳や江戸火消	好敏	雨含む名残りの花の香に酔はむ	朱鷺子	けふのみの花や水面に漲れり	玲
花散ればまた褻の貌や裏の山	美恵	たましいの花に寄りそう深大寺	碧		
干す傘に花の名残を止めけり	和子	吉祥文彫りし大破風花の寺	冬乃		
花簪子と孫達に囲まれて	光夫	ポトマック河畔を揺らす花嵐	未悠		
異国となりし故郷や花も老いぬらむ	路子	白灯台赤灯台に花の雨	要子		
花吹雪のなかの片々子ら走る	央子	歳月や花は否と降り悲と積り	瑞枝		
花大樹人の流れの変わりけり	あかり	花人としてまぎれたる上野かな	志乃		
山々を染めし形見の花衣	一恵	いぶかしく犬ぞ見あげん花吹雪	鐵男		
		ふり仰ぐ名残りの花の大樹かな	和代		
		アムロ・レイ・ガンダムを駆る花天かな	鶴鳴		
		花のみち往き骨壺と戻りけり	あや		
		胴吹きの花のいのちの嬉しかり	美奈子		
		花吹雪掴み取らんとエトランゼ	暁巳		
		流鏝馬の発止発止と花明り	清子		

【花繚乱なるままに順不同】



撮影 高橋豊美

